

カタカナ語とその類義の和語・漢語の文脈による使い分け

—日本語学習者と母語話者に対する調査の比較から—

The Use of *Katakana* Words and their Synonyms in Different Contexts: A Comparison of Survey Results for Japanese Language Learners and Native Speakers of Japanese

山下直子¹・畑 ゆかり²・轟木靖子¹

Yamashita Naoko, Hata Yukari, Todoroki Yasuko

要約

カタカナ語（外来語）の一部は、日本語の語彙の中で基本語彙として定着しつつあることが指摘されている。しかし、このようなカタカナ語の使用に関する記述は辞書にもあまりなく、日本語学習者にとってカタカナ語とその類義の和語や漢語との使い分けは難しい。本研究ではカタカナ語の効果的な語彙指導・学習を検討するため、日本語学習者と日本語母語話者が文脈によってカタカナ語とその類義語をどのように使い分けしているのかを探る質問紙調査を実施した。その結果、学習者にとって文脈によって使い分けの難しさは異なり、難しさはその意味がどの程度一般的に使われているかに起因することなどが示唆された。

キーワード：カタカナ語，外来語，類義語，使い分け，語彙

1. はじめに

従来、日本語の語彙においてカタカナ語（外来語）は周縁的な存在とされてきたが、その一部が基本語彙として定着しつつあることが指摘されている（金 2012・2016等）。カタカナ語がこれまで使われていた和語や漢語の類義語と共存する、あるいはそれに代わって使用されるようになってきているのである。しかし、このようなカタカナ語の使用に関する記述は辞書にもあまりなく、日本語学習者にとって類義語との使い分けは難しい。

本研究ではカタカナ語の効果的な語彙指導・学習を検討するため、文脈によってカタカナ語とその類義語を日本語学習者がどのように使い分けしているのかを明らかにし、使い分けの困難点を探ることをめざす。語彙の習得、学習に関して、Nation (2001) は語彙知識を「語形」「意味」「使用」の三つに分類し、さらに「使用」の下位分類を「文法的機能」「コロケーション」「使用時の制約（レジスターや頻度）」

としている。ここでは、この語彙知識の「使用」、特に、カタカナ語がどのような文脈や場面で使われるのかということに焦点をあてる。

なお、カタカナで表記される語は外来語が一般的であるが、和製外来語や非外来語の表記も増えており、それらを含めた学習が必要になると考え、本稿ではカタカナ語という語を用いる。

2. 先行研究

カタカナ語の氾濫は話題になって久しく、金（2012：29-30）は使用される量は確実に増加し、その一部は広範囲・高頻度で使用される「基本語彙」へ進出して「基本語化」していることを指摘している。しかし、日本語の語彙においてカタカナ語は周縁的で、カタカナ語の研究がいまだに不十分な状態にあるといわれる（茂木 2015等）。日本語教育でも語彙の学習や指導において注目されることは少

1 香川幸町大学教育学部

2 穴吹ビジネスカレッジ

なく、日本語学習者にとってカタカナ語は学習が難しいものの一つであるとされながら、その指導や学習は十分とは言えない状況である(石綿 2001, 中山・陣内・桐生・三宅 2008等)。カタカナ語の定着が進み類義語との共存も生じる中で、特に両者の使い分けは学習者にとって困難点となることが予想される。

この使い分けに関して、山下・畑・轟木(2018)では日本語母語話者を対象者としてカタカナ語とその類義語を提示して思いつく文の産出と両者の違いの自由記述をする調査をおこなった。その結果、母語話者は両者の使い分けに、①カタカナ語にニュアンスが付加、②カタカナ語のほうが多義的、③特定の使用に限られ役割分担といった一定の基準を持つことが明らかになった。また、山下・畑(2019)では日本語学習者に同様の調査をおこない、学習者も自分なりのルールに基づきカタカナ語と類義語を使い分けようとしているものの、日本語母語話者とは違いやずれがみられ、使い分けが難しいことを指摘している。

山下・平田(2020)は、国立国語研究所の「現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)」を用いて日本語母語話者のカタカナ語の使用状況を分析した結果、コーパスの使用実態においても類義語との使い分けが認められた。藤原・山下(2021)では国立国語研究所の「I-JAS」多言語母語の日本語学習者横断コーパスを用いて使用状況を分析した結果、語によって程度は異なるが、日本語学習者の使用実態は母語話者と違いがみられることが明らかになった。特に、学習者にとって文脈による類義語との使い分けや共起語の選択などが難しいことがわかった。しかしながら、具体的な文脈でのカタカナ語と類義語の使い分けに関しては十分に解明されているとはいえない。そこで、本稿ではカタカナ語の「使用」に焦点を当て文脈によるカタカナ語の使い分けの困難点を探ることをめざし、文脈や場面によってカタカナ語とその類義語を学習者がどのように使い分けしているのかを母語話者の結果と比較して明らかにすることを目的とする。

3. 調査概要

(1) 調査対象者

調査対象者は、日本語学習者75名と日本語母語話者53名の計128名である。日本語学習者は日本の大学・日本語学校で学ぶ日本語レベルが中上級(日本語能力試験N1・N2程度)の学習者である。内訳の性別は男性36名、女性37名、年齢は10代7名、20代66名、30代2名で、出身国・地域別では中国36名、ベトナム10名、台湾8名、韓国6名、マレーシア4名等である。日本語母語話者は学習者と同地域で学ぶ大学生である。内訳は男性13名、女性40名で、年齢は10代1名、20代52名である¹。

(2) 調査期間と調査方法

調査期間は2019年1月から2020年2月である。日本語学

習者と日本語母語話者それぞれに質問紙による調査をおこなった。事前に調査の目的と概要を説明し結果は研究のみに利用し個人情報とは特定されないことを口頭と文書で伝えて同意を得て、調査をおこなった。調査は主として集合調査であり、授業終了時等に質問紙を配布して記入してもらった。

(3) 質問紙の調査項目

質問項目はカタカナ語とその類義の和語・漢語が使われる文脈で、ふさわしいと思うカタカナ語か類義語、あるいは両方に丸をつけて選んでもらった。提示した文脈は、山下他(2018)で日本語母語話者が産出したカタカナ語・類義語を含む文と山下・畑(2019)で日本語学習者が産出した文、さらに『広辞苑第七版』『明鏡国語辞典第二版』『日本国語大辞典第二版』等の辞書の語義と用例を参考にし、それぞれ5問から10問設定した。性別と年齢、学習者には母語と日本語能力について聞くフェイスシートもつけた。なお、学習者用の質問紙では一部の漢字に振り仮名をつけた。以下に質問項目の例を示す。

質問項目の例

- ①にんじんを(カットする / 切る)から、包丁をとってください。
②このりんごは、4つに(カットして / 切って)、お皿に盛りましょう。

(4) 調査語彙

調査に用いた語彙は、澤田(1993)の基本外来語のうちコーパスでの使用頻度の高いサ変動詞で、山下他(2018)で日本語母語話者の使い分けに一定の基準があるとされたカタカナ語とその類義の和語および漢語の6ペアである。具体的には、「カットする・切る、カバーする・補う、スタートする・開始する、チェックする・点検する、トレーニングする・練習する、リラックスする・くつろぐ」の12語である。

4. 結果と考察

質問紙調査のデータを集計し日本語学習者と日本語母語話者の回答を比較した。その結果、学習者も母語話者と同じようにカタカナ語と類義語を使い分けしている項目もあるが回答の違いがある項目もみられ、文脈によって使い分けの難しさの度合いが異なることが明らかになった。以下、ペアごとに結果と考察を述べる。

(1) 「トレーニングする・練習する」の結果

「トレーニングする・練習する」のペアでは①から⑦の文脈を設定した。日本語学習者(L)と日本語母語話者(J)の結果を表1に示す。表中の数字は上からカタカナ語、類義語、両方を選択した人数・割合と無回答の人数である。

表1 「トレーニングする・練習する」の結果

	①		②		③		④		⑤		⑥		⑦	
	L	J	L	J	L	J	L	J	L	J	L	J	L	J
カタカナ語	5	0	52	51	3	2	34	29	64	48	18	2	2	0
	6.7%	0.0%	69.3%	96.2%	4.0%	3.8%	45.3%	54.7%	85.3%	90.6%	24.0%	3.8%	2.7%	0.0%
類義語	62	53	16	1	69	50	30	15	9	4	48	50	70	51
	82.7%	100%	21.3%	1.9%	92.0%	94.3%	40.0%	28.3%	12.0%	7.5%	64.0%	94.3%	93.3%	96.2%
両方	8	0	6	1	3	1	11	9	2	0	9	1	3	2
	10.7%	0.0%	8.0%	1.9%	4.0%	1.9%	14.7%	17.0%	2.7%	0.0%	12.0%	1.9%	4.0%	3.8%
無回答	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0

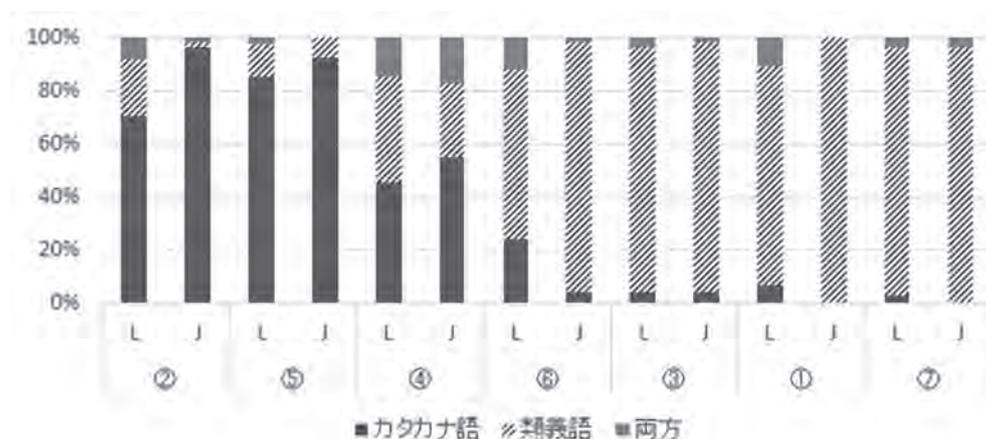


図1 「トレーニングする・練習する」の結果

図1は結果を左から母語話者のカタカナ語の回答割合が高いものから並べたものである。

回答にずれがみられた文脈は二つで、今回の調査では、比較的、学習者も母語話者と同じように使い分けしているペアであるといえよう。⑥「試合が近いので夜遅くまでテニスを－」では、「練習している」を母語話者は94.3% (50)²が選択しているが、学習者は最多ではあるが64.0% (48)である。②「毎日、ジムで筋肉を鍛えるために」は、母語話者の96.2% (51)が「トレーニングしている」であるが、学習者は69.3% (52)にとどまり、いずれも人数の偏りは有意であった(両側検定: $p < .01$ Fisher直接確率検定による)³。「トレーニングする」はスポーツ関連で多く使用されるという大枠のみの理解にとどまる学習者もいるためであると考えられる。

⑦「きれいに書けるように何度も書いて字を－」では、学習者93.3% (70)と母語話者96.2% (51)、③「スピーチ大会の前に何度もくりかえし－」も学習者92.0% (69)と母語話者94.3% (50)、①「毎日2時間、ピアノを－」も学習者82.7% (62)と母語話者100% (53)が「練習する」を選択している。一方で、⑤「この会社では三ヶ月間しっかり新人を－」では、「トレーニング」と学習者85.3% (64)、母語話者90.6% (48)が回答し、同じような使い分けの傾

向を示している。なお、④「マラソン大会に向けて毎朝、－」では母語話者も学習者も回答が割れておりコミュニケーション上の問題は少ないと思われる。

(2) 「カバーする・補う」の結果と考察

次に、日本語母語話者の傾向と違いがみられたペアについて述べる。まず、「カバーする・補う」のペアでは①から⑩の文脈を設定した。結果を表2と図2に示す。

「覆う」という意味の①「傷がつかないようにスマホをケースで－」は、「カバーしている」のカタカナ語が最も多く学習者90.7% (68)、母語話者100% (53)が回答している。逆に、「不足をみたく」意味の⑨「とても暑いので、ときどき水分を－」では類義語の「補ってください」を学習者93.3% (70)、母語話者98.1% (52)と共に9割以上が選択しており、同じ傾向を示した。これらの文脈・場面では学習者も母語話者と同様にカタカナ語と類義語を使い分けられていることがわかる。

一方で、学習者と母語話者にずれがある結果も6項目あった。音楽のカバーバージョンという意味の②「若者に人気の歌手が昔の曲を－」やスポーツで味方を助ける意味の⑦「ゴール前で香川選手は味方の動きをしっかりと－」では、母語話者は「カバーした」がそれぞれ100% (53)、90.6% (48)と9割を超え多くがカタカナ語を使っている。

表2 「カバーする・補う」の結果

	①		②		③		④		⑤		⑥		⑦		⑧		⑨		⑩	
	L	J	L	J	L	J	L	J	L	J	L	J	L	J	L	J	L	J	L	J
カタカナ語	68	53	43	53	11	12	7	13	51	43	50	50	38	48	19	28	5	0	41	21
	90.7%	100%	57.3%	100%	14.7%	22.6%	9.3%	24.5%	68.0%	81.1%	66.7%	94.3%	50.7%	90.6%	25.3%	52.8%	6.7%	0.0%	54.7%	39.6%
類義語	5	0	28	0	60	27	64	29	19	1	19	1	30	2	49	16	70	52	30	25
	6.7%	0.0%	37.3%	0.0%	80.0%	50.9%	85.3%	54.7%	25.3%	1.9%	25.3%	1.9%	40.0%	3.8%	65.3%	30.2%	93.3%	98.1%	40.0%	47.2%
両方	1	0	1	0	4	14	4	11	5	9	5	2	3	1	5	9	0	0	4	3
	1.3%	0.0%	1.3%	0.0%	5.3%	26.4%	5.3%	20.8%	6.7%	17.0%	6.7%	3.8%	4.0%	1.9%	6.7%	17.0%	0.0%	0.0%	5.3%	5.7%
無回答	1	0	3	0	0	0	0	0	0	0	1	0	4	2	2	0	0	1	0	4

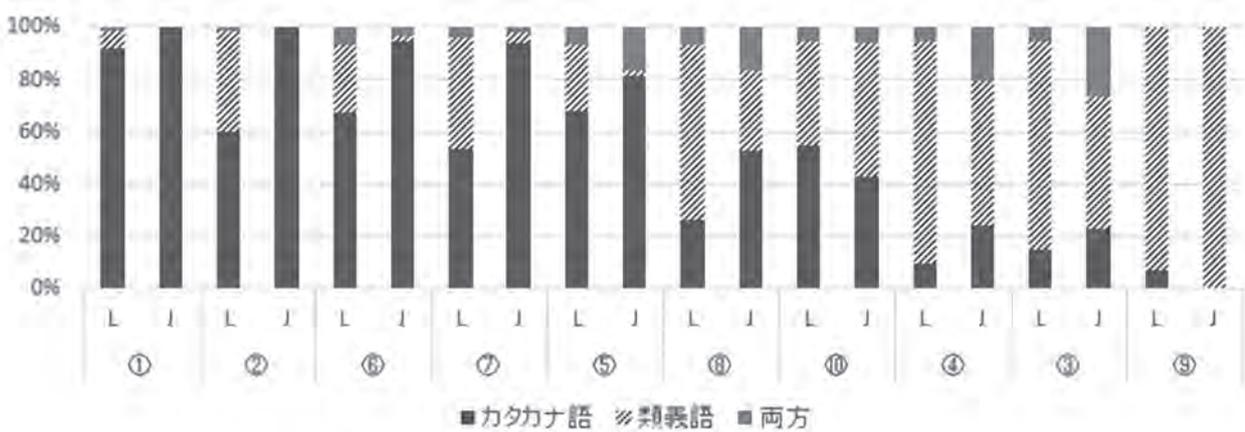


図2 「カバーする・補う」の結果

しかし、学習者で、②はカタカナ語57.3% (43) と類義語37.3% (28)、⑦もカタカナ語50.7% (38) と類義語40.0% (30) であり、学習者と母語話者の人数の偏りは有意であった(両側検定: $p < .01$)。⑥「アルバイトを始めたばかりの後輩のミスを一」と⑤「仲間の失敗を皆で一」とでは、「カバーした」が母語話者で94.3% (50) と81.1% (43) である。学習者も66.7% (50) と68.0% (51) と多いが、母語話者で1名のみである「補った」をいずれも25.3% (19) が選択しており、人数の偏りは有意であった(両側検定: $p < .01$)。足りない点を補うという文脈では使い分けている学習者も一定数みられるが、カタカナ語の使用を避ける傾向があると考えられる。このように「覆う」意味以外の文脈で学習者は母語話者と同じようにカタカナ語を使うことが難しく、山下・畑 (2019) で指摘されているように「カバーする」が類義語の「補う」より多義的で使える範囲が広い点を学習者は理解できていないといえよう。

さらに、母語話者の間でも回答にゆれがみられる文脈もあり、⑧「あの選手は努力で欠点を一」は、使い分けのない「両方」を想定したが、母語話者は「カバーしている」52.8% (28)、「補っている」30.2% (16)、両方17.0% (9) と割れたが、学習者は「補っている」65.3% (49) が最も多く、 χ^2 検定の結果、人数の偏りは有意であった($\chi^2(2) = 14.90, p < .01$) ④「できるだけ野菜を食べて足りない菜

養を一」も、学習者は「補っている」が85.3% (64) だが、母語話者は54.7% (29)、「カバーしている」24.5% (13)、両方20.8% (11) と回答が割れ偏りは有意であった(両側検定: $p = .0093$)。これらの文脈では学習者は「補う」選択する傾向が高く有意差はあるものの、母語話者にもゆれがみられコミュニケーション上の問題は小さいと思われる。なお、③「アルバイトで月々の支出の不足を一」と⑩「この保険は何でも一なので、おすすめです。」は、母語話者にゆれもあり人数の偏りも有意ではなかった。

以上のように、全体として学習者の「カバーする」の使用範囲は母語話者に比べて狭い一方で、母語話者は個人差もあるがカタカナ語の使用範囲には広がりがありカタカナ語の使用される文脈が広がりつつある可能性も考えられる。

(3) 「チェックする・点検する」の結果

「チェックする・点検する」のペアでは①から⑨の文脈を設定した。結果を表3と図3に示す。

②「出かける前に忘れ物がないか一」は学習者89.3% (67) と母語話者73.6% (39)、④「書類を出す前に間違いがないか一」も学習者81.3% (61) と母語話者73.6% (39) が「チェックする」を選択している。一方で、⑧「安全のために定期的に車を一もらっている。」は学習者72.0% (54) と母語話者73.6% (39)、⑤「ドライブの前に車を一」は

表3 「チェックする・点検する」の結果

	①		②		③		④		⑤		⑥		⑦		⑧		⑨	
	L	J	L	J	L	J	L	J	L	J	L	J	L	J	L	J	L	J
カタカナ語	63	53	67	39	41	51	61	39	14	5	38	53	47	51	12	5	16	3
	84.0%	100%	89.3%	73.6%	54.7%	96.2%	81.3%	73.6%	18.7%	9.4%	50.7%	100%	62.7%	96.2%	16.0%	9.4%	21.3%	5.7%
類義語	6	0	7	4	29	0	8	2	49	36	29	0	26	0	54	39	52	41
	8.0%	0.0%	9.3%	7.5%	38.7%	0.0%	10.7%	3.8%	65.3%	67.9%	38.7%	0.0%	34.7%	0.0%	72.0%	73.6%	69.3%	77.4%
両方	6	0	1	10	5	2	6	12	11	12	5	0	2	1	8	9	7	9
	8.0%	0.0%	1.3%	18.9%	6.7%	3.8%	8.0%	22.6%	14.7%	22.6%	6.7%	0.0%	2.7%	1.9%	10.7%	17.0%	9.3%	17.0%
無回答	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	3	0	0	1	1	0	0	0

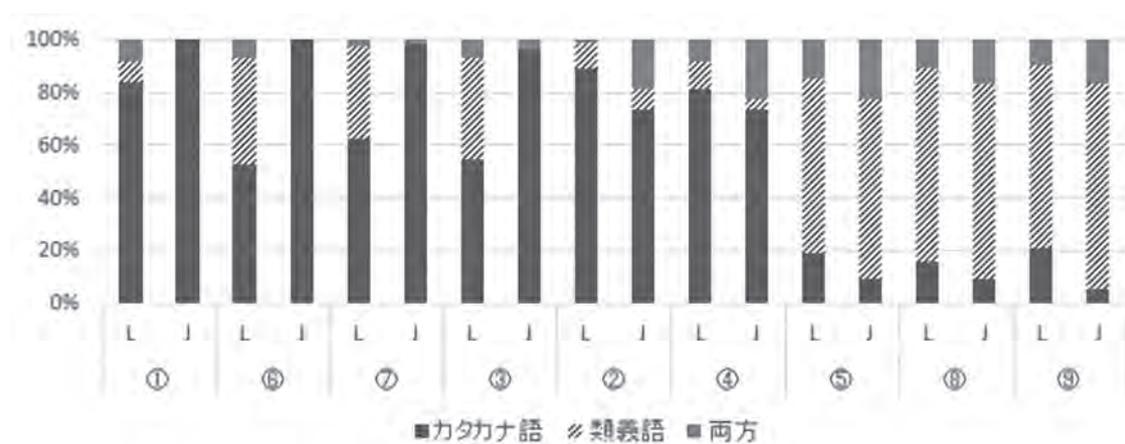


図3 「チェックする・点検する」の結果

学習者65.3% (49) と母語話者67.9% (36) が「点検して」と回答している。これらの文脈では母語話者の2割程度が両方を選択しており厳密な使い分けがあるとは言えないが、学習者と母語話者の回答が同じような傾向であることがわかる。

このペアでは5項目で学習者と母語話者にずれがみられ、⑥「田中さんは、いつも新しいお店を－」で、母語話者は100% (53) が「チェックしている」を選択しているが、学習者では50.7% (38) で「点検している」も38.7% (29) が選択している。同様に、③「コンサート会場の入り口で人の出入りを－」と⑦「来週の試験では会話の能力を－」は母語話者ではカタカナ語が96.2% (51) で類義語0% (0) であるが、学習者では類義語が38.7% (29), 34.7% (26) でカタカナ語は54.7% (41), 62.7% (47) と割合が下がり、人数の偏りは有意であった (両側検定: $p < .01$)。また、①「受付で参加者の名前に－」では「チェックする」と母語話者の100% (53) が回答したが、学習者は84.0% (63) と多いものの類義語や両方の選択も8.0% (6) おり、人数の偏りは有意であった (両側検定: $p = .0353$, $p < 0.05$)。さらに、⑨「年に一度、業者が来てガス機器を－」では「点検する」が母語話者69.3% (52) と学習者77.4% (41) と両者ともに多いが、学習者は「チェックする」も21.3% (16) で、人数の偏りは有意であった。(両側検定: $p = .0224$,

$p < .05$)。

⑨以外では、母語話者のほとんどがカタカナ語を使う文脈で使えない学習者が多いというずれがみられた。⑥の「お店をチェックする」のような比較的新しい使い方も含めて幅広くさまざまな文脈で母語話者と同じように「チェックする」を使うことは、学習者にとって難しいようである。「チェックする」や前項で述べた「カバーする」などの多義的なカタカナ語は、どの程度一般的に使われている意味かによって使い分けの難しさが異なることが示唆された。

(4) 「カットする・切る」の結果

「カットする・切る」のペアでは①から⑨の文脈を設定した。結果を表4と図4に示す。

刃で傷つけるという意味の④「ナイフで手を－しまった」では母語話者が100% (53), 学習者が89.3% (67) 「切っ」と回答し、⑦「この動画は長すぎるので少し－しましょう」ではよくない部分を切り捨てるという意味の「カット」と母語話者88.7% (47), 学習者76.0% (57) が回答しており、いずれも人数の偏りは有意でない。意味でカタカナ語と和語を使い分けているといえる。また、②「このりんごは4つに－, お皿に盛りましょう」は両方を想定した文脈であり揺れもあるが、母語話者77.4% (41), 学習者78.7% (59) が「切る」と回答し同じ傾向がみられた。

表4 「カットする・切る」の結果

	①		②		③		④		⑤		⑥		⑦		⑧		⑨	
	L	J	L	J	L	J	L	J	L	J	L	J	L	J	L	J	L	J
カタカナ語	13	0	9	4	46	52	5	0	8	0	23	3	57	47	12	0	43	5
	17.3%	0.0%	12.0%	7.5%	61.3%	98.1%	6.7%	0.0%	10.7%	0.0%	30.7%	5.7%	76.0%	88.7%	16.0%	0.0%	57.3%	9.4%
類義語	52	49	59	41	25	0	67	53	61	53	45	50	11	3	59	53	16	39
	69.3%	92.5%	78.7%	77.4%	33.3%	0.0%	89.3%	100%	81.3%	100%	60.0%	94.3%	14.7%	5.7%	78.7%	100%	21.3%	73.6%
両方	10	4	7	8	3	0	2	0	4	0	4	0	7	3	3	0	15	9
	13.3%	7.5%	9.3%	15.1%	4.0%	0.0%	2.7%	0.0%	5.3%	0.0%	5.3%	0.0%	9.3%	5.7%	4.0%	0.0%	20.0%	17.0%
無回答	0	0	0	0	1	1	1	0	2	0	3	0	0	0	1	0	1	0

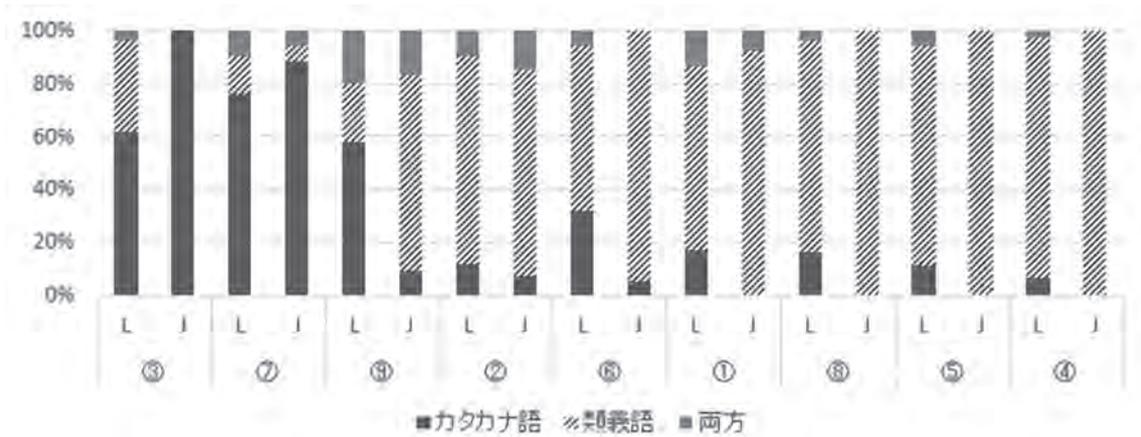


図4 「カットする・切る」の結果

一方、6項目では差が見られ、①「にんじんをーから、包丁をとってください」は、母語話者で「切る」92.5% (49)、両方7.5% (4)だが、学習者は「切る」69.3% (52)「カットする」17.3% (13) 両方13.3% (10)と割れ、人数の偏りは有意であった(両側検定: $p < .01$)。また、母語話者は③「景気が悪いから、冬のボーナスが20%ー」では「カットされた」が98.1% (52)、⑤「暑いからエアコンをーください」と⑧「景気が悪いから冬のボーナスが20%ー」と⑥「終了時間まで3分をー」では類義語がほぼ100%に近くゆれがみられず、カタカナ語と和語を使い分けている。これに対し、学習者は、③では「カットされた」61.3% (46)、⑤⑧⑥では類義語が多いものの81.3% (61)、78.7% (59)、60.0% (45)にとどまり、母語話者と学習者の人数の偏りは有意であった(両側検定: $p < .01$)。学習者の結果はいずれも割れており使い分けが十分とは言えない。

さらに、⑨「3年も付き合っている彼にふられた。明日、髪をーことにしよう」では、母語話者73.6% (39)が「切る」と回答したのに対し、学習者は57.3% (43)が「カットする」と回答し、 χ^2 検定の結果、人数の偏りは有意であった($\chi^2(2) = 38.79, p < .01$)。母語話者は「カットする」にはプラスのイメージが付加されると考え、この文脈では使用しないが、学習者は単に髪を切ることと考え、カタ

カナ語に付加されるイメージによって使い分けしていないことが明らかになった。これらの結果から誤用や非用を減らすためには、「切る」の慣用的な使用も含めた明示的な指導が必要であろう。

(5) 「リラックスする・くつろぐ」の結果

「リラックスする・くつろぐ」のペアでは①から⑤の文脈を設定した。結果を表5と図5に示す。

②「試合前、ーために大谷選手は好きな音楽を聴くそうだ」は「リラックスする」の選択が学習者88.0% (66)、母語話者96.2% (51)と同じ傾向を示した。また、⑤「風呂にゆったりつかりー。」は母語話者も学習者も回答に揺れがあり人数の偏りも有意ではなかった。

しかし、④「長旅でお疲れでしょう。どうぞゆっくりーください。」は、母語話者は「くつろいで」が77.4% (41)であるが、学習者は41.3% (31)で「リラックスして」が52.0% (39)と多く反対の結果となった。また、①「お正月は家族と家でー」では、母語話者は「くつろいだ」が88.7% (47)であるが、学習者は48.0% (36)で「リラックスした」も44.0% (33)と結果が割れ、いずれも人数の偏りは有意であった(両側検定: $p < .01$)。このように母語話者が主に「くつろぐ」と回答する文脈でカタカナ語を選ぶ学習者も多く、類義の和語や漢語の難易度が高く馴染みのない場合、学習者はカタカナ語をむしろ使用する傾向

表5 「リラックスする・くつろぐ」の結果

	①		②		③		④		⑤	
	L	J	L	J	L	J	L	J	L	J
カタカナ語	33 44.0%	1 1.9%	66 88.0%	51 96.2%	56 74.7%	53 100%	39 52.0%	3 5.7%	46 61.3%	31 58.5%
類義語	36 48.0%	47 88.7%	7 9.3%	2 3.8%	17 22.7%	0 0.0%	31 41.3%	41 77.4%	20 26.7%	11 20.8%
両方	6 8.0%	5 9.4%	2 2.7%	0 0.0%	2 2.7%	0 0.0%	5 6.7%	9 17.0%	9 12.0%	11 20.8%
無回答	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

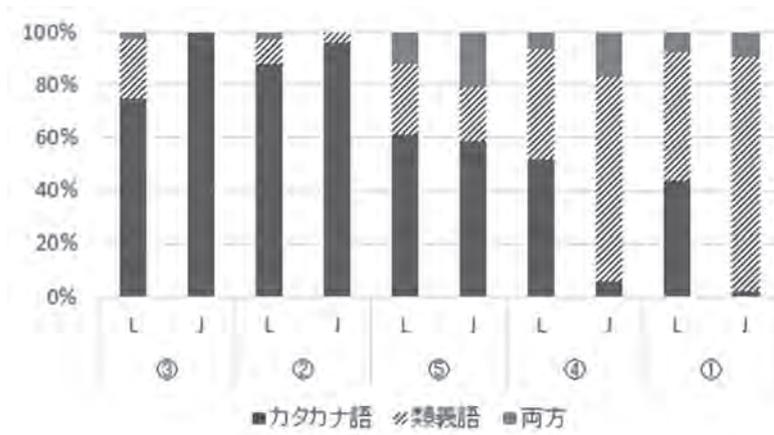


図5 「リラックスする・くつろぐ」の結果

もあると考えられるが、この点に関して更なる調査が必要である。さらに、③「今までたくさん練習したから大丈夫です。がんばってください。」は、母語話者は「リラックスして」が100% (53) であるが、学習者は74.7% (56) にとどまり、人数の偏りは有意であった (両側検定: $p < .01$)。学習者は「リラックスする」を主に使う文脈で母語話者と同じように使えているものの、「リラックスして何かに挑む」という文脈での使用は難しいようである。今後は、意味だけでなく構文も含めた検討が必要である。

(6) 「スタートする・開始する」の結果

「スタートする・開始する」のペアで①から⑥の文脈を設定した。結果を表6と図6に示す。

すべての項目で人数の偏りが有意であった。山下他 (2018) で、「スタートする」は「新しい」「新～」を用いた語と共起した産出文が多く、「開始する」は「試験」「会議」といった固いイメージの語と共起し、「レース」のような語とは共起していなかった。本研究においても日本語母語話者は、②「来週から新しい生活が- するかと思うと、ドキドキする」で「スタートする」94.3% (50)、④「それでは、試験を-。携帯電話の電源は切っていますか」で「開始します」96.2% (51)、⑤「明日のマラソン大会は、選手が10時に-」で「スタートします」81.1% (43) と回

答しており、先行研究と同様の結果になった。

しかし、⑥「パーティーをきっかけに、二人は交際を-、結婚することになった」では60.4% (22) の母語話者が「スタートして」、20.8% (11) が「開始して」と回答しており、「新しい門出」「交際」といった新しい何かが始まるというプラスのイメージの語であっても、「開始する」が選択されている。また、①「午前9時にチケット予約の受付が-」は両方を想定した文脈であったが、「開始します」と回答した母語話者は15.1% (8) に留まり、60.4% (32) が「スタートする」と回答している。スポーツ関連の③「ただ今よりレースを-」でも64.2% (34) の母語話者が「開始します」と回答している。母語話者にゆれのある項目も多く、これは使い分けが意味だけではなく、「スタートする」が自動詞として、「開始する」が他動詞として用いられる傾向が強いという構文的な違いも影響することが理由として考えられる。茂木 (2011) もカタカナ語変動詞に関して意味と文法的観点からの分析が重要であることを述べており、今後さらに意味と構文の両面からの調査を検討する必要がある。

5. まとめと今後の課題

日本語学習者と日本語母語話者におこなった質問紙調査

表6 「スタートする・開始する」の結果

	①		②		③		④		⑤		⑥	
	L	J	L	J	L	J	L	J	L	J	L	J
カタカナ語	18	32	41	50	38	12	13	0	46	43	25	32
	24.0%	60.4%	54.7%	94.3%	50.7%	22.6%	17.3%	0.0%	61.3%	81.1%	33.3%	60.4%
類表語	40	8	24	0	18	34	48	51	18	4	41	11
	53.3%	15.1%	32.0%	0.0%	24.0%	64.2%	64.0%	96.2%	24.0%	7.5%	54.7%	20.8%
両方	17	13	9	3	16	7	14	2	9	6	7	10
	22.7%	24.5%	12.0%	5.7%	21.3%	13.2%	18.7%	3.8%	12.0%	11.3%	9.3%	18.9%
無回答	0	0	1	0	3	0	0	0	2	0	2	0

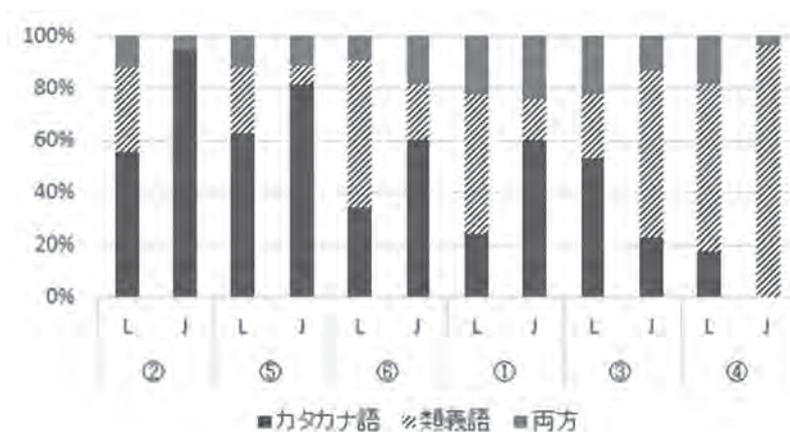


図6 「スタートする・開始する」の結果

の結果を比較した結果、母語話者と同じようにカタカナ語と類義語を使い分けている項目もあったが母語話者との違いもみられ、学習者にとって使い分けの難しさは文脈により異なることが明らかになった。幅広くさまざまな文脈で多義的なカタカナ語を使うことや慣用句的な使い方は難しく、その難しさはどの程度一般的に使われている意味かに関与することなどが示唆された。

意味だけでなく自動詞・他動詞による使い分けがみられるペアも母語話者の回答にはあったため、今後は構造の違いも考慮した調査を検討する必要もある。さらに、今回の調査語彙は6ペアと限られるため、より多くの語について調査をおこない、学習の優先順位の高い文脈や場面を明らかにして、これまで明示的な指導の機会が少なかったカタカナ語学習の検討をめざしたい。

注

- 1 日本語母語話者の産出した文には世代による差がみられたため(山下他2018等)、本研究では学習者とほぼ同世代である大学生の母語話者に調査をおこなった。
- 2 以下、選択した割合(%)とカッコ内は人数を示したものである。
- 3 日本語学習者と母語話者の結果の人数の偏りについては χ^2 検定を

おこなったが、5人以下の回答がある場合はカタカナ語と類義語の回答結果で直接確率計算をおこなった。

参考文献

石綿敏雄 (2001) 『外来語の総合的研究』東京堂出版
 金愛蘭 (2012) 「外来語の基本語化」陣内正敬(編)『外来語研究の新展開』29-45, おうふう
 金愛蘭 (2016) 「語彙の周辺部から中心部へ『進出』する外来語 - 『抽象的な外来語の基本語化について』 - 」『日本語学』vol.35-7, 12-22, おうふう
 澤田田津子 (1993) 「日本語教育のための基本外来語について」『奈良教育大学紀要』42(1), 225-239.
 中山恵利子・陣内正敬・桐生りか・三宅直子 (2008) 「日本語教育における『カタカナ教育』の扱われ方」『日本語教育』138, 83-91.
 藤原史織・山下直子 (2021) 「日本語母語話者のカタカナ語とその類義語の使用実態-BCCWJコーパスの分析から - 」『日本語教育連絡会議論文集』34, 91-100.
 茂木俊伸 (2011) 「コーパスを用いた外来語サ変動詞の分析 - 『カットする』を例として - 」『特定領域研究「日本語コーパス」平成22年度公開ワークショップ(研究成果報告書)予稿集』, 103-110.

- 茂木俊伸 (2015) 「コーパスを用いた外来語サ変動詞の分析
- 『マークする』を例として-」『文学部論叢』106, 83-
95.
- 山下直子・畑ゆかり (2019) 「日本語学習者のカタカナ語と
類義語の使い分け-産出文と自由記述の分析から-」『日
本語教育連絡協議会論文集』32, 90-99.
- 山下直子・畑ゆかり・轟木靖子 (2018) 「日本語母語話者の
カタカナ語と類義語の使い分け-カタカナ語とその類義の
和語・漢語の調査から-」『香川大学教育学部研究報告第
I部』149, 45-52.
- 山下直子・畑ゆかり・轟木靖子 (2021) 「カタカナ語とその
類義語の文脈による使い分け-質問紙の調査から-」『2021
年度日本語教育学会春季大会予稿集』, 104-109.
- 山下直子・平田史織 (2020) 「日本語母語話者のカタカナ語
とその類義語の使用実態-BCCWJコーパスの分析から-」
『日本語教育連絡会議論文集』33, 109-118.
- Nation, I. S. P. (2001) *Learning Vocabulary in Another Language*.
Cambridge: Cambridge University Press.

辞書

- 北原保雄編 (2010) 『明鏡国語辞典 第二版』大修館書店
新村出編 (2018) 『広辞苑 第七版』岩波書店
日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部
編 (2002) 『日本国語大辞典 第二版』小学館

謝辞 調査にご協力いただいた日本語学習者と日本語母語話者の皆様に感謝いたします。本稿は日本語教育学会春季大会(2021年5月)で口頭発表した内容に加筆, 修正したものです。貴重なコメントをいただいた方々に感謝の意を表します。また, 本研究はJSPS科研費JP20K00699の助成を受けたものです。